2024年（令和6年）
2月号（No. 945）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

創立120周年記念事業
グレート・ヒマラヤ・トラバース／ステージⅣ〈下〉

マナスル山群～アンナプルナ山群のハイルートおよびナムン峠を踏査

記念事業委員会委員長　重廣恒夫

GHTステージⅣの後半部、日本人におなじみのマナスル・サーキットを周遊、かねてから気に掛かっていたナムン峠を踏査、さらにアンナプルナ・サーキットを巡る山旅を重廣隊長がレポート。

マナスル・サーキットを行く

マチャ・コーラ（川）からマナスル・サーキットに入ると途端に行き交うトレッカーが増えたが、踏査中に出会った日本人は4人だけだった。サマ集落から見たマナスル（8163m）は、貴婦人のごとく光り輝いていた。また、ラルキャ・ラ（峠）はサマやソムダンから馬で登る人も多く、にぎわっていた。

10月24日：マチャ・コーラ～タトパニ～ジャガット（1340m）8時間25分、16・6km

これから先はほとんどロッジ泊まりとなるので、ポーター13人を解雇した。

25日：ジャガット～フィリム～チソパニ～ペワ（1718m）7時間19分、15・7km

岩壁が切り立つ道を進む。途中の大滝は風に吹かれて霧状となり、飛沫は我々には降り注がない。

26日：ペワ～デン～ビヒ～ガップ（2300m）6時間57分、9・7km

27日：ガップ～ナムルン～リヒ～ロー（3180m）10時間16分、15・6km

28日：ロー～サマ（3520m）5時間36分、7・7km

29日：サマ～マナスルBC手前（4420m）往復　7時間3分、10・2km

30日：サマ～サムド（3875m）3時間3分、7・4km

31日：サムド～ラルキャ・バザール～ダラムサラ（4460m）4時間34分、5・9km

11月1日：ダラムサラ～ラルキャ・ラ（5135m）～ビムタン（3590m）12時間6分、14・8km

2日：ビムタン～ゴワ（2515m）7時間29分、13・1km

3日：ゴワ～トンチェ（1965m）6時間23分、8・1km

サマ集落から見上げたマナスル。左が主峰

目　次

マナスル山群～アンナプルナ山群のハイルートおよびナムン峠を踏査……1
シャルプーⅥ峰初登頂はならず前衛峰タナプーに登頂……4
県内の山をほぼ全て網羅した『かながわ山岳誌』を発刊！……6
八甲田連峰北部で計画されたみちのく風力発電事業は白紙撤回！……7
さんけん通信……8
追悼　浦一美支部長を偲んで……9
山の名著再読……10
東西南北……12
活動報告　山行委員会……14
支部だより　信濃支部……15
新入会員……15
図書紹介……16
会務報告……17
ルーム日誌……18
会員異動……18
INFORMATION……18
編集後記……19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金……10～20時
第1、第3、第5土曜日……10～18時
第2、第4土曜日……閉室

●行程図は前号、1月号6ページを参照してください。

ナムン峠に向かう朝、マナスル（左）とP29を望む

4日：トンチェ～ティマン（2750m）3時間50分、7㎞

気掛かりだったナムン峠を踏査

ナムン峠はアンナプルナ・サーキットからは外れるが、街道の村ティマンから往復した。1953（昭和28）年にアンナプルナⅡ峰からⅣ峰に転進した、京都大学学士山岳会（AACK）隊の隊長だった今西壽雄さんが撮影したマナスル三山（マナスル／P29：7871m／ヒマルチュリ：7893m）の写真を、マナスル登山隊の公式報告書『マナスル 1954～6』の巻頭に見た。この「ナムン・バンジャンより見たマナスル山群、左よりマナスル、P29、ヒマルチュリの諸峰」と題された写真と同じものを、ナムン峠から撮りたいと思ったからである。

また、第4回の踏査計画を作る過程で、海外の情報によると市販されている『Trekking Map 100 Series 1:125,000 NP107 ANNA-PURNA NAAR&PHU』のティマン（Timang）からナムン峠（Namun Bhanjyang）へのルートと標高が間違っていると指摘されていたことと、トニー・ハーゲン（スイスの地質学者。1950年、ネパール入国以来、1万4000㎞を徒歩踏査）の著書『The Kingdom in the Himalayas』（町田靖治訳、白水社刊）の文中に「ポカラからマルシャンディ渓谷へと横断するナムン峠（5800m）は、インド測量局の25万分の1の地図には間違って載っていたのだろうか。あるいは、地図上に載っているルートを私が見落としただけのことだろうか」と、地図の間違いを示唆していたからでもある。

11月5日：ティマン～ダンフェ・カルカ（7時間50分、6・3㎞、登り1706m、下り98m）

体調不良の藤井隊員を残し、隊員3名とカトマンズ・スタッフ2名、ポーター3名でダンフェ・カルカ（放牧地）を目指す。ティマンのロッジからティマン橋まで戻り、森林帯につけられた山道をたどる。途中の苔むした積石や桟道が、古くからの交易ルートであることを感じさせる。森を抜け出ると眼下にティマンの村が見えた。疎林帯を過ぎるといったん傾斜は緩くなるが、その後は急坂となりダンフェ・コル（4295m）にたどり着く。目前にダンフェ・カルカ（4218m）の広大な台地が広がっていた。

6日：ダンフェ・カルカ～ナムン峠往復（7時間7分、6・5㎞、登り730m、下り730m）

キャンプサイトから岩礫の中のケルンに導かれながら峠に向かう。ルートが判然とせず歩きにくい道も、雪道に変わると、先日フランス隊が下ってきた足跡もあり歩きやすくなった。しかし、徐々に高度の影響も出てきて歩みが鈍くなる。あそこが峠だと思っていた場所が手前の稜線で、さらに先の峠まで岩壁が屹立していた。また、出発後から雲が出て、マナスルとP29を望見したのを最後に、マナスル三山が二度と姿を見せることがなかったのは残念だった。

雪道は急な九十九折りになり、よくぞこんな急崖に造ったと思える石積みの階段が、岩壁の隙間を縫って峠に続いている。登り始めて4時間半、やっと峠に立った。峠は雲に包まれ視界はないが、道標がナムン峠（4850m）であることを教えてくれる。いつまで待っても展望は開けそうにないので、数枚の写真を撮ってキャンプサイトに駆け下った。

7日：ダンフェ・カルカ～ティマン（5時間35分、6・6㎞、登り108m、下り1700m）

カルカより古い道形をたどってダンフェ・コルに登り、一気にティマンまで下る。GPSデータからトポマップに転送した軌跡を見る限り、官製地図やトレッキング・マップのティマンからナムン峠までのルートと標高は、明らかに異なっていた。

アンナプルナ・サーキットへ

ナムン峠からティマンに戻りアンナプルナ・サーキットに入ると、マナスル・サーキットよりもさらに多くのトレッカーが西へと向か

っていた。マナンまでは自動車道が通じているので車でマナンに向かう人も多く、加えて西方のムクチナートからトロン・ラを越えた後、マナンから車で下山するトレッカーも多い。未舗装道路を頻繁に往き来する車が巻き上げる砂塵に、マスクが外せなかった。

秋から冬に向かうので、マナンから先は樹々の緑が消え、赤茶けた大地が広がっていた。振り返ると雪を抱いたアンナプルナ山群の山並みが見えて、まだヒマラヤの山中にいるとの感慨に耽った。

たどり着いたトロン・ラには、マナスル北方のラルキャ・ラよりも多くのトレッカーが訪れていた。

11月６日、待望のナムン峠に立ったが視界なし

ここにも日本人の姿はなかったが、欧米人に混じってインドや中国、韓国からのグループも記念写真を撮っていた。また、トロン・フェディから馬で一気に登ってくる人も多く、喧騒の峠であった。

峠からムクチナートに向かって下る途中、左手前方にはサンスクリット語で「白い山」を意味するダウラギリ山群の山々が見え始め、北側には、西ネパールの赤茶けた大地と山並みが広がっていた

８日：ティマン～コト（２６００ｍ）２時間38分、６・７㎞

カトマンズに戻る藤井隊員とアシスタント・ガイドおよびローカル・ポーター３名を見送って、隊員３名とガイド、カトマンズ・ポーター３名で踏査を再開した。

大岩壁にうがたれた道路をコトからピサンに向かう

９日：コト～チャーメ～バラタン～ピサン（３２００ｍ）７時間45分、16㎞

10日：ピサン～フムデ～マナン（３５４０ｍ）７時間８分、15・２㎞

マナンは２階建ての石造りの家が密集した大集落で、民家の３階に泊まった。いわゆる民泊で、食事も２階のダイニング・ルームでポーターたちと一緒にとった。

11日：マナン滞在。カルチャー・ミュージアムを訪問、昼食にヤク・ステーキを食べる。

12日：マナン～レダー（４４５０ｍ）６時間49分、11・２㎞

マナンを出発しトロン・フェディ（４５２５ｍ）に向かった。振り返ると朝靄の中に家々の朝餉の煙がたなびき、マルシャンディ川が白蛇のように光り輝いていた。

13日：レダー～トロン・ハイキャンプ（４８３３ｍ）４時間18分、５・５㎞

グーサンからヤク・カルカに向かう途中、振り返るとアンナプルナⅡ峰（７９３７ｍ）やⅣ峰（７５２５ｍ）、Ⅲ峰（７５５５ｍ）、ガンガプルナ（７４５４ｍ）の峰々を見ることができた。

14日：トロン・ハイキャンプ～トロン・ラ（５４１６ｍ）～ムクチナート（３７６０ｍ）９時間12分、12・８㎞

夜、設立10周年を記念してダウラギリＢＣを訪問された、群馬支部パーティの八木原さんや根井支部長ら15人が滞在されているホテルを訪問して懇親した。

15日：ムクチナート～カグベニ～ジョムソン（２８１０ｍ）１時間（車）、９・５㎞

朝早く巡礼の聖所ジョムラキ・ゴンパを訪れた。真っ暗な部屋の中、本尊観音菩薩像の下に燃え尽きることない青い炎（天然ガス）が見えた。跪いて覗き込まないと見えないので、はたから見るといかにも信仰心が篤いように見える。

16日：ジョムソン～ポカラ（８２０ｍ）７時間７分（車）、１５３・６㎞

17日：サランコットの丘～山岳博物館～カトマンズ

夜明け前にタクシーでアンナプルナ・ビューホテルを訪問。染まりゆく山々を眺めながら井本社長と旧交を温めた。

REPORT

シャルプーⅥ峰初登頂はならず 前衛峰タナプーに登頂

ヒマラヤキャンプ2023　石川貴大

未踏峰を目指して

2023年秋、私たちはネパール東部に位置するシャルプーⅥ峰（6076m）という未踏峰を目指した。今回は、日本山岳会ヒマラヤキャンプ登山隊2023としての遠征である。期間は10月2日から11月25日までの約2ヶ月間だ。

メンバーは、プロジェクト・リーダーの花谷泰広さんと金子貴裕、寺田紗規、石川貴大の4名である。花谷さん以外の3名は、初めてのヒマラヤ登山だ。最初の計画では2座の登頂を目指す計画であったが現地で変更し、今回はシャルプーⅥ峰のみの登頂を目指すこととなった。

TC1から見上げたシャルプーⅥ峰（左）とタナプー

初めてのネパール

ヒマラヤだけでなく、ネパール自体が初めてのメンバーであったため、ネパールの何もかもが新鮮で楽しませてくれるものだった。くねくね曲がる山岳道路を勢い良く走るバス、未舗装のがたがた道を突き進むジープ、村から村へのキャラバン。日本での日常とは一味違う、ネパールらしさを堪能させてもらった。ベースキャンプに着くまでは登山というよりもネパールを旅している、そんな気分だった。体調不良などもあったが、それぞれにネパールを体感しながら、BCを目指すことになった。

シャルプーⅥ峰との対峙

キャラバンを終え、最後の村となるカンバチェンに着くと、私たちが目指すシャルプーⅥ峰が見えた。未踏峰であるが故に情報も少なく、インターネットで拾った画像や、グーグルアースでしか見たことがなかった山が目の前にそびえていた。画像で見るということと、自分の目で実際に見るということは大きく違うと思った。これが自分たちの目指す山なのだ、と心が高揚した。

村から見る山容は穏やかな形だった。村から2時間ほど上がった標高4600m付近にBCを設置し偵察を始めると、徐々にヴェールがはがされ全容が見えてきた。村から見た穏やかな山容とは異なり、回り込んだ先にある想定ルート側は氷河をまとった威圧感のある壁になっていた。その壁は、日本でイメージしていたヒマラヤの山々のイメージと合致するものだった。いくつかルートを検討した上で、落石やセラック崩壊の影響を受けにくい北側のコルに氷河から上がるルートを選択し、準備を開始した。

花谷さんとの登山

今回の遠征では約1ヶ月間、花谷さんが同行してくれた。限られた時間ではあったが、花谷さんがこれまでのヒマラヤ遠征で経験したことを学ばせてもらった。BCに入るまでに1週間ほどかかるエリアということもあり、日程的に氷河よりも上へ一緒に上がることができたのは1日だけだった。それが1回目のサミット・プッシュとなった。日本にいるときからいろいろとアドバイスをしてくださっていた花谷さんと一緒に登頂したいという気持ちは強かったが、私たちの順応具合や装備面の再調整などもあり、仕切り直すことになった。

その後は花谷さんと別れ、メンバー3人のみでの登山となった。リーダーシップのある花谷さんに頼ってしまう部分も多くあったため、自分たちで考えて登る状況に変わったことは大きな変化だった。分からないなりにも3人で考え、試行錯誤しながら進んだ時間は、貴重な時間だったと思う。最初の入り口となる部分を花谷さんから教わり、それから先は自分たちで考える、これはヒマラヤキャンプだからこそできたことでもあると思う。

前衛峰タナプーを越えて

花谷さんとのサミット・プッシュを終えた後、南面の偵察を行なったが、北のコルから攻めるルートの方がやはり良いということになり、1回目のサミット・プッシュと同ルートをたどり、北のコルから前衛峰を越えてシャルプーⅥ峰を目指すことになった。この前衛峰というのがタナプー（598０m）と呼ばれるピークである。私たちがシャルプーⅥ峰の山頂を踏むには、タナプーを越える必要があった。逆に、越えられさえすれば後は稜線をたどるだけなのではないか、と考えていた。

コルからタナプーに上がる所に岩セクションがあったため、事前に60mのフィックス・ロープを張った。これを使い2回目のサミット・プッシュを行なった。2回目ということで体も順応してきており、順調にタナプー山頂へ続くフルートに入った。中途半端に緩い雪に時間と体力を奪われた。フルートを抜けるとタナプーの山頂ではなく、リッジが数百m続いていた。また、シャルプーⅥ峰はそのはるか先に見えていた。時間が全然足りない。タナプーに登れば後はなんとかなるというのが、甘い考えであったことを思い知らされた。このとき、3人で決めたタイム・リミットを超えていたため、2回目のサミット・プッシュの撤退を決めた。タナプーをもっと早く越えられなければ、シャルプーⅥ峰には届かない。

夕暮れ迫るタナプー山頂に立つ。左はシャルプーⅠ・Ⅱ峰

タナプー山頂で記念撮影。これが3人にとっての山頂だった

最後のサミット・プッシュ

2回目のサミット・プッシュは正直、玉砕だった。ただ、それでも山頂を目指したいという気持ちは残った。最後の最後ということで、これまでのハイキャンプを5600mまで上げて、ファイナル・キャンプを設置した。これはタナプーにかける時間を極力減らすためだ。また、5100mにも別のテントを置き、サミット・プッシュの際は標高を徐々に上げ、体力を温存する計画に変更した。

日程はバック・キャラバン前日の下山予定となり、本当に最後のチャンスとなった。2回目よりも早い時間にタナプーの肩まで上がり、リッジをトラバースした。しかし、ここで予想よりも時間がかかってしまった。正直、時間的にはシャルプーⅥ峰には届かないかもしれないと思ったが、皆で行ける所まで行こうと決め、いったんコルに下る。コルから氷河帯を登り返してしばらく行くと、氷河が途切れていた。時間的にも、ここが戻る選択をすべきタイミングだった。山頂に向かいたい気持ちをそれぞれ抑えながら撤退を決めた。

夕暮れが迫る中、タナプーへと引き返す。行きで踏まなかったタナプーの山頂を3人で踏んだ。初めてのヒマラヤで、初めて踏んだ山頂。目標の山頂ではなかったが、これが3人にとっての山頂となった。悔しさは残ったが、日程ぎりぎりまでこの山に向き合うことができて、どこか清々しい気持ちにもなった。

登山を終えて

今回の遠征で、それぞれが自分に足りないものを実感することができた。自分の足で踏み込み、実際に見て体験したことで、これからどんなことをすべきかが見えたのだと思う。私たちは、ヒマラヤキャンプを通じてヒマラヤ登山のスタートラインに立つことができた。ヒマラヤに行くきっかけを得ることができたことは、本当にありがたいことだと思う。この登山で感じたこと、学んだことを大切に、これからの登山につなげていきたいと思う。

編集者、新著を語る

県内の山をほぼ全て網羅した『かながわ山岳誌』を発刊！

神奈川支部　森　武昭

神奈川支部は、本会の33番目の支部として2016年3月に発足した。その設立記念事業として、可能な限り県内の全てのピークとそれに付随した峠を踏査し、そこに根付いた多くの文化情報を取りまとめるとともに、学術的観点から県下の山岳の特徴を記して一冊の書として出版することにした。本書は、単なるガイドブックではなく、神奈川県内の山域を総合的に俯瞰することを目的としている。

踏査は17年4月からスタートし、新型コロナ感染症の影響で当初の予定より1年遅れたが、23年5月に完了した。最終の山行は、日本山岳会創設に尽力した岡野金次郎翁の銅像が立つ平塚市の湘南平で行ない、無事に踏査が終了したことを報告した。踏査では、道標の不備があったり、三角点が確認できなかったり、低山でも予想外の激ヤブに悩まされたり（写真参照）のハプニングにも遭遇した。

踏査に関しては、進捗状況に合わせて17年5月号、20年4月号、23年3月号の会報に報告している。

この踏査と並行して、『かながわ山岳誌』出版へ向けた作業も精力的に行なってきた。すなわち、早い段階で、それぞれの分野において第一線で活躍されている識者による玉稿をいただくことができた。一方、踏査に関してはコースごとに、山行後に詳細な報告書をエクセル・シート上で記録として残した。そして、踏査が終盤に差し掛かった23年1月ごろから出版のフォーマットを決めて、前述の記録を基に踏査報告・文化情報・山行記録を作成して原稿を仕上げていった。その上で、余白が生じた箇所には興味ある題材に関してのコラムを編集者で分担して執筆した。具体的な内容は以下のとおり。

第1章「概要」では、目的、対象とした踏査点、踏査コースの設定、実施概要を記している。

第2章では、神奈川県内山域の特徴を次の6分野について取り扱っている。①地質に関して：平田大二氏（神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員）②山岳気象に関して：猪熊隆之氏（気象予報士）③植物に関して：勝山輝男氏（前記博物館元学芸部長）④動物に関して：山口喜盛氏（前記博物館外来研究員）⑤山岳信仰に関して：鈴木正崇氏（慶應大学名誉教授）⑥山名・峠名に関して：砂田定夫氏（神奈川支部監事）

第3章では、県内を次の8つの地域に分けて踏査コースごとに踏査報告と文化情報および山行記録を記載している。①東丹沢18コース　②西丹沢20コース　③北丹沢14コース　④箱根16コース　⑤鎌倉・三浦9コース　⑥湘南7コース　⑦県北8コース　⑧横浜・川崎2コース。

付録では、山名・峠名の由来の一覧と踏査点一覧（50音順）を記載している。また、本書では、県の全図や地域ごとの地図上に、実際の踏査で使用したGPSの記録と主な山名の記載を自らの手で作成したことも特長となっている。

これらを通して、県内の山域が幅広い分野で多様な特性を有していることが鮮明になった。そこで、この出版の意義を広く理解していただくために、記念講演会を開催することにした。詳しくは今号のインフォメーション欄に掲載されている。本書は山と溪谷社発行で、定価2200円（税込み）。アマゾンと楽天ブックスで購入できる。書店には並んでいないが、店頭で申し込むと取り寄せできる。

ときにはヤブをこいでの踏査も。箱根・孫助山の頂上近くで

NEWS

八甲田連峰北部で計画された みちのく風力発電事業は白紙撤回！

いちのへ義孝

八甲田連峰の北部で計画されていた「（仮称）みちのく風力発電事業」は、㈱ユーラスエナジーホールディングスが6市町、約1万7300haの想定区域に、出力4000～5000kW級の風力発電を120～150基設置するもので、総出力は60万kW、風力発電では国内最大級である。

この計画が白紙撤回されるまでの市民団体の活動を、日付を追って振り返ってみる。

2021年9月、事業者が「（仮称）みちのく風力発電事業環境影響評価配慮書を縦覧」公告。

同年12月、八甲田山ガイドら3人が「Protect Hakkoda ～八甲田の自然を後世に～」を立ち上げ、計画の中止を求める署名活動を開始。問題点として①計画地のほぼ全域が森林区域で、一部国立公園も含まれる。②四季折々の眺望・景観へのダメージ。③土砂崩れや水の汚染など災害へのリスク。④鳥類や動植物など生態系に及ぼすリスクを提示。

22年5月、当時の青森県知事と青森市長に、計画に関する要望と公開質問書並びに署名7627筆を提出。

8月、当時の青森県知事が私事として反対の立場を明確にした。

9月、当時の青森市長は行政としては中立で、推進・反対の立場ではないと表明。

10月10日、「八甲田300年の森に迫る危機～自然保護と風力発電を考える～」シンポジウムを開催。同じ風力発電問題に向き合っている宮城県・加美町の市民団体が応援に駆け付け、講師には朝日新聞の中山由美氏、日本自然保護協会の若松伸彦氏、上智大学大学院地球環境学研究教授の織朱實氏が講演を引き受けてくれた。約150人の参加者は事の重大さを認識した。終了後、平内町長は関係自治体として初めて反対を表明。

10月、八甲田散策会を開催。

10月30日、青森市議会選挙。公約には八甲田風力反対・白紙撤回！

12月、七戸町長が反対表明。市民団体は事業者に署名1万2737筆を提出。青森市議会は中止を求める意見書と市民からの中止を求める請願を全会一致で可決。当時の青森市長は全会一致の可決はしっかり受け止め行動したい、と発言。

23年2月、事業者は風車を半減し、最大71基を提案。

3月、事業者は市民団体の要望を受け、県内6ヶ所で住民説明会を実施。中立の立場と公言していた青森市長が次期青森県知事選に立候補。「みちのく風力発電事業」に対しても反対を表明。

6月、青森県知事選と青森市長選の、どの候補者も公約に白紙撤回を掲げ、「みちのく風力発電事業」が争点になり、県知事に宮下宗一郎氏、市長に西秀記氏が当選、首長の入れ替えが決まった。

8月、西市長が関係首長に意見照会、白紙撤回で一致したため、事業者に6市町の総意として白紙撤回の意見書を提出。

10月10日、事業者が計画の中止を発表。以上、市民団体の主な活動であった。

現青森県知事は、立地禁止区域を定めるとしている。今回、地域住民は計画すら知らない人が多かった。市民団体主催のシンポジウムで関心を持ち、青森市議会選挙、青森市長・県知事選挙では誰もが白紙撤回を公約として掲げた。青森県全体が明確に反対の意思を示しており、後は事業者に委ねられていた。

一つ悔やまれることは、21年8月、別事業者による八幡岳風力発電事業の風車を運ぶため、ブナのトンネルの枝が、伐採で空が丸見えになったこと。こんな計画があったのかと驚いているうちに、8基の風車が立ってしまった。12月に稼働開始。田代平や北八甲田の多くの頂から見え、景観が一変したのは本当に残念だった。

＊

市民団体の賛同人として署名運動を呼び掛け続けた約2年でしたが、日本山岳会をはじめ皆様のご協力で白紙撤回に漕ぎ付けることができました。反対署名や寄付してくださった皆様に、心から感謝いたします。

（青森市在住、写真家）

さんけん通信

冬の上高地のスノー・ハイキング

山田和人

1月下旬に、山研の様子を見に行ってきました。上高地は11月の中旬に閉山、それ以降はバスもタクシーも入ることができません。ホテルや山小屋も営業していません。この時期に入るには、国道158号の中の湯交差点（釜トンネル入り口）から歩いて入ることになります。中の湯には駐車場がありませんので松本⇔高山のバスに乗り、中の湯バス停で降ります。

歩き始めは自動車道のトンネル。昨シーズンまでトンネル内は暗く、ヘッドランプが必要でしたが、今シーズンは照明塔が新しくなり、ランプなしで歩けるようになっています。釜トンネルは1・5㎞あり、曲がりくねりながらの上り坂で、いちばんきつい所は11％の勾配がありますので、スタスタ歩こうとすると意外に息が上がってしまいます。トンネル出口は降雪が続くと右上から雪崩の危険があるので注意しながら出て、もう一つトンネルを潜ると真横で焼岳が迎えてくれます。

訪れる人も少なく、ひっそりとたたずむ河童橋

ここからは雪道となっている県道（夏はバスが走る道路）を進んで行きます。数日降雪がなければ踏み跡があるので、登山靴のままあるいはチェーン・スパイクなどの軽アイゼンで明るい上り坂を歩いて行けます。新たな積雪があれば、スノーシューかワカンがないとラッセルが厳しいでしょう。

道が右にカーブして下りにかかる箇所で、晴れていれば真っ白な穂高の稜線が綺麗に見えます。道の左側は梓川の谷、右側は山の急斜面なので、常に右側からの雪崩に注意する必要があります。その先の大正池は静かに広がっていて、モノトーンの世界に鴨が飛び立ちます。大正池手前の右斜面には小さな谷が入っていて、昨年3月には雪崩で怪我人が出ました。

大正池からは夏の遊歩道を歩きます。冬は葉が茂っていないので、ハンノキやダケカンバの灌木の間から先が見通せる明るい道となっています。ニホンザルが飛び回りながら笹の葉を食べているシーンに出会えることもあるでしょう。田代湿原からの穂高は、夏とは違った表情を見せてくれます。ほどなく中ノ瀬園地に到着です。

ひと休みしたら田代橋・穂高橋を渡って右岸へ。ここからは梓川の大曲りを見ながら歩きます。ウエストン碑は雪が着いて寒々しい感じですが、埋もれることはありません。西糸屋が見えたら河童橋です。風雪に耐えるその姿は、なぜか夏より大きく見えます。岳沢方面に目をやると、河畔のケショウヤナギの枝が紅色に染まって、モノトーンの中でちょっと不思議な光景となっています。この景色は冬の上高地でしか見られません。山研まで少し足を延ばしてみると、冬を耐えている建物が少し小さく見えるのは、積雪のせいでしょうか。積雪深は50～70㎝程度でした。

雪に埋もれ、静まり返る山研

河童橋までは景色を眺めながらゆっくり歩いて2～3時間。帰りはバスの時間を気にしながら左岸側の県道をどんどん歩いて行きます。針葉樹の森の道路なので少々暗いですが、大正池まで一気に歩けます。大正池からは往路と同様雪崩に注意しながらトンネルへ。

上高地の冬を楽しむスノー・ハイキング、皆さんもいかがでしょうか。なお、トイレは大正池・中ノ瀬園地・小梨平の3ヶ所です。遊歩道や県道など、指定されたルート以外には踏み込まないことがルールです。それと登山届を釜トンネル入り口のポストへ。

（上高地山岳研究所管理人）

追悼
OBITUARY

浦一美支部長を偲んで

渡部秀樹

昨年7月、浦一美さんとはヨーロッパ・アルプスでハイキングを楽しんでいた。コロナ禍での制限が明け、以前から浦さんの登山教室受講者の方々との約束で企画されたもので、私も同行した。現地ではシャモニ在住の国際山岳ガイド・白野民樹氏も合流し、それぞれがかつて登った山々を眺め登山史にも触れながら歩くと、生徒さんたちも聞き入っていた。マッターホルンを背景にビールを飲み、饒舌になった浦さんの笑顔が忘れられない。

帰国後も福岡支部の山岳古道調査山行の準備で頻繁にお会いしていたが、体調が思わしくないとのことで治療に専念するため企画の延期を決めた。10月中旬に検査入院されたが、わずか2週間で帰らぬ人となってしまった。直前までお元気だったので、信じ難いことであった。

浦さんは1971年、しんつくし山岳会の海外登山研究会から分離独立した福岡GCC（グレイシャー・クライマーズ・クラブ）の結成メンバーで、代表の太田五雄氏、倉智清司氏らとともに屋久島の未踏ルートの開拓から始まり、ネパールやパキスタン、チベットの山々に挑戦していった。73年にランタン・ヒマールへ入り、これがきっかけでサラリーマン生活を終え、76年、福岡市に「山とスキーの店・ラリーグラス」を創業された。「ラリーグラス」では、初心者から海外遠征隊まで地域の登山者のサポート、登山文化の普及に尽力されてきた。私も大学時代から店にはお世話になり、いろいろなアドバイスを受けていた。長年カルチャー・スクールなどで登山教室を担当されたこともあり、卒業生の山の会の監修などもされていた。

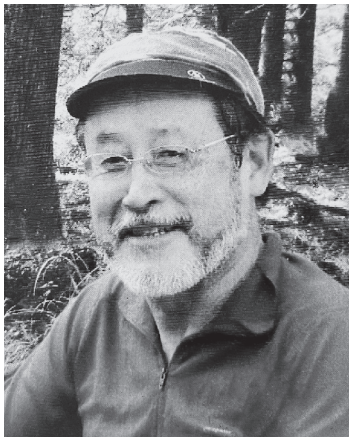
福岡県山岳連盟福岡支部を改め、91年に福岡市山岳協会が設立された。浦さんは、過去の古い体質を改め、若い会員たちの夢と希望をかなえさせたいという思いからの設立だった、と語っていた。福岡は登山が盛んで、昭和初期からその活躍ぶりは世に知られていた。先輩方の流れを受け継ぎ若い会員たちも育っていたが、単一の山岳会では難しい、大きな海外遠征登山の流れを創り出そうとされた。設立から3年間の準備を経て96年、福岡市山岳協会・チョモランマ峰登山隊が組織され、池邊勝利隊長以下15名の隊員で見事に登頂に成功した。

社会人山岳団体会員の減少が始まると登山事故も増え、衰退した山岳団体では登山者育成に対応がしきれなくなると考え、九州でもガイド業の必要性が生じた。浦さんは公益社団法人・日本山岳ガイド協会所属の全九州アルパインガイドクラブを結成し、長年会長を務められた。

日本山岳会では創立100周年記念事業の中央分水嶺踏査、創立120周年記念事業の全国山岳古道調査の福岡支部担当山行を実施リーダーとして担当され、2021年からは福岡支部長に就任されていた。

まさに九州の登山界を牽引してきた人生であった。本業の継承も完遂され、これから支部長として福岡支部の活性化に尽力していただけると皆が期待していただけに、哀惜の念に堪えない。

（福岡支部事務局長）



浦　一美（うら・かずみ）
会員番号9506

1947年	福岡県生まれ
1971年	福岡ＧＣＣ設立
1973年	ランタン・ヒマール遠征
1976年	「山とスキーの店・ラリーグラス」を創業
1991年	福岡市山岳協会が設立される
1998年	日本山岳会福岡支部ナムナニ遠征隊に参加
2021年～	日本山岳会福岡支部長ほか福岡市山岳協会会長、全九州アルパインガイドクラブ会長などを歴任

2023年11月3日　逝去、享年76

連載■文庫本でも楽しめる

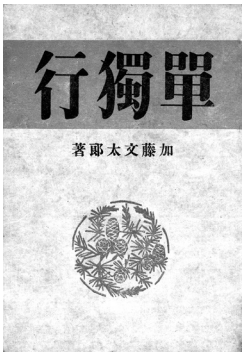
山の名著再読

⑾『単独行』（加藤文太郎著・朋文堂）

萩原浩司

『単独行』は「生まれながらの単独登山者」とまで言われた加藤文太郎の遺稿集である。

昭和初期、高峰の雪山登山がまだ一般的でなかった時代に、加藤は独りで厳冬の北アルプスを縦横に踏破。なかでも有名なのは薬師岳から黒部五郎岳・鷲羽岳・水晶岳を経て烏帽子岳に至る縦走の記録である。スタート地点は飛越線（現・高山本線）の猪谷駅で、ゴールは大糸線の大町駅（現・信濃大町駅）。長いアプローチを加えたこの行程を、加藤は10日間で踏破した。山中では無人の山小屋に泊まりながら、ときには「雪の孔を掘り、カッパを上に張って潜り込んだ」休憩をはさんで真夜中の稜線を歩き続けた日もあった。



昭和16（1941）年、朋文堂版初版発行

2月に槍ヶ岳から笠ヶ岳を往復した記録にも驚かされる。笠ヶ岳登頂後、小屋を見つけることができずに夜通し歩き続けて槍の肩に帰着した。往路では稜線から離れて双六岳頂上を往復。帰路では懐中電灯を打込谷に落としてしまい、拾いに行くといった時間のロスがあったものの、夏でも22時間かかる区間を32時間で踏破している。

人並み外れた体力を持ち、雪山でも着の身着のままで寝て平然としていた「不死身の加藤」。しかし1936年1月、風雪の槍ヶ岳・北鎌尾根で、パートナーの吉田富久とともに帰らぬ人となってしまう。そして彼の死後、関係者によって雑誌や会報などに発表された文章を中心に編集、刊行されたのが私家版の『單獨行』であった。

その後、同書は朋文堂によって編集し直されて41年に商業出版物として刊行。70年には二見書房から「山岳名著シリーズ」の一冊として、文章の配列を変えて編集された『単独行』が出版される。

昭和後期に広く読まれていたのはこの二見書房版で、私も中学生のときに同書を読む機会を得た。新田次郎の小説『孤高の人』の主人公として描かれた加藤文太郎に興味を持って手に取ってみたのだが、どうしても腑に落ちない点があった。もともと書籍にすることを考えて書かれた文章ではないため、読みやすいとは言い難い部分があるのは仕方ないとして、文章の配列に強い違和感を覚えたのである。それは最初に登場する文章が厳冬期の槍ヶ岳／立山／穂高岳の記録であったこと。同書は加藤の文章を時系列に並べて編集しているのにもかかわらず、いきなり冬の記録から始まるのはどう考えてもおかしい。巻末の年表と原稿末尾の日付を照合し、明らかに日付の間違いであると確信した。

そんな私に『単独行』を編集する機会が訪れた。98年、山と溪谷社で山岳図書の編集部に異動となった私は、山の名著を集めた「yama-kei classics」シリーズを企画提案して承認を得る。その1冊目に『単独行』を加えたのは言うまでもない。

新編集に当たり、読者の理解を助けるために当時の時代背景など、詳しい解説を加える編集方針を打ち出した。そして、私家版と朋文堂版の『單獨行』を参考に掲載順を整理し、フリー編集者の福島功夫氏に依頼して各章ごとに解説文を添えていただいた。そこには登山史上における加藤文太郎の位置づけ、新田次郎の『孤高の人』に描かれた加藤文太郎と比較しての人物像、雪中でのビヴァークを恐れず装備や食料に独自の工夫を凝らした登山スタイル、そして、加藤が残したエッセイや論考から読み取る彼の登山観など、淡々と記された加藤の文章を深く読み解くためのヒントが満載されている。こうして2000年4月に刊行されたのが『新編・単独行』である。

それから10年後、同書は2010年に創刊されたヤマケイ文庫の1冊として刊行され、今も版を重ねている（税込み1034円）。

（図書委員会委員）

⑫『青春を山に賭けて』

（植村直己著・毎日新聞社）

井上優美

本書は、日本を代表する冒険家・植村直己が世界で初めて5大陸最高峰を登った経緯などを記した、青春の世界放浪記である。のちに数々の偉業を成し遂げた冒険家の原点とも言うべき書である。

植村の初めての著作で、１９７１年に毎日新聞社から初版が出版され、77年に文藝春秋から文庫化されて以降、現在まで多くの人に読み継がれている。「ドングリ」とあだ名を付けられた青年が「世界の山を登りたい」という目標に青春の全てを懸け、苦労しながらも抜群の行動力で次々と夢を実行していく姿に、心を震わせた人も多いだろう。

昭和46（1971）年初版発行

植村は41年、兵庫県城崎郡国府村（現・豊岡市）の農家の７人兄弟の末っ子として生まれた。山に囲まれた自然豊かな環境で育ち、いたずら好きの普通の少年だった。明治大学山岳部に入り、山と出会う。劣等感をバネに持ち前の粘り強さで努力を重ね、着実に力を付けていく。

外国の山への憧れを強めていたころ、64年、外貨持ち出しの自由化で個人の海外旅行への道が開かれた。「氷河を見たい」という思いを胸に、無一文で移民船「アルゼンチナ丸」に乗って世界に飛び出していくのである。カリフォルニアの農場やフランスのスキー場で節約しながら猛然と働き、資金を貯めては山旅を続ける。65年に明大ゴジュンバ・カン遠征に参加し初登頂。66年のモン・ブラン単独登頂を皮切りに、キリマンジャロ単独登頂、68年にアコンカグアを単独登頂したのち、アマゾン河をイカダで下る。70年に日本山岳会のエベレスト登山隊に参加して日本人初の登頂者となり、マッキンリー（現・デナリ）を単独登頂して世界初の５大陸最高峰登頂者となった。

キリマンジャロの前に登ったケニア山では、猛獣のいるジャングルの中、ピッケルを武器に枯葉一枚落ちる音にも聞き耳を立てながら通過し、麓にたどり着く。アマゾンでは、河下りの経験は全くないが、アメリカに戻るのに「安い」し、「ちょっぴり冒険」してみたくなり、イカダを自作して底の見えない濁流のアマゾン河を世界で初めて60日間をかけて下るのである。冒険の一つ一つが自由で型破りなのにどこか素朴な印象で、やりたいと思ってやればできるのかもしれない、と思ってしまう。

ほとんどの冒険で「無謀」「単独は危険」と反対されるが、そのたびに「やってやるぞ！」と闘志を燃やし、人がなんと言おうと、自分の体で可能と判断できれば自分の意志を貫く。不法労働で捕まっても、その冒険に懸ける想いを必死に調査官にぶつけ、支援を得てしまう。人の心を動かさずにはいられないひたむきさと謙虚で誠実な人柄も、植村直己が世界で愛される所以（ゆえん）である。世界中を駆け巡ったが「誰ひとりとして悪人はいなかった」と言い、単独登山は「周囲のたくさんの人々の協力をあおがなければ絶対にできない」と語る。

本書の随所で見られる異文化への適応力の高さを最大限発揮していくのは、世界放浪に続く極地の旅である。『極北に駆ける』『北極圏一万二千キロ』『北極点グリーンランド単独行』の３作を読むと、冒険家としての心身の強靭さと深い人間的魅力をさらに知ることができる。

本書は50年以上前の放浪記であるが、登山を巡る状況や時代が変わっても「自分の限界を求め、何かを見いだしたい」ともがく人の心に変わりはない。自分で実際に直面して肌で感じ取り、その経験を重ねていくことによって、未知の世界への夢を描き続けた植村の冒険は、今もなお輝きを放ち続けている。

今年は植村直己が１９８４年２月12日、マッキンリーの冬期単独初登頂に成功後、消息を絶って40年になる。本書に触れ、改めて植村直己が遺したものに思いを馳せてみたい。

文庫版は、文春文庫（新装版２００８年初版発行、税込み７８１円）で読むことができる。

（図書委員会委員）

西北東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

オゼソウの発見からヒマラヤ植物調査へ―原寛博士と元アンナプルナ遠征隊員の記憶―

小原　茂延

尾瀬のすばらしい自然を世に紹介し、「尾瀬の父」と呼ばれた武田久吉が、『植物学雑誌』掲載の早田氏の一文を目にして尾瀬に入ったのは明治38年7月。仲間の早川某と2人で、湿原で時に股まで浸かるほどの難儀をしながら植物採集を行なった由で、『山岳』第1巻第1号に「尾瀬紀行」として報告している。

牧野富太郎が尾瀬での採集を行なったのは昭和4年8月で、あまりに植物を採るので平野長蔵翁が、研究すると同時に保護を考えろと一喝したと、その場に居合わせた長蔵小屋2代目の長英氏が記憶しており、歌人、生方たつゑの夫である生方誠氏の証言もある（『尾瀬―山小屋三代の記』）。伊吹山での採集といい、標本作製の上で量が必要とはいえ、牧野富太郎の一面を見せていて考えさせられた。

会報937号で牧野富太郎のことを書いたところ、かつてアンナプルナⅢ峰日本女子登山隊（1970）の遠征隊員で、撮影担当でもあった梅本知榮子（旧姓漆原）永年会員から、牧野のことをご存じならと、植物学者の原寛氏について尋ねられた。梅本さんによると、アンナプルナⅢ峰登頂（田部井淳子・平川宏子）の後、下山のキャラバンが出発する間に、ベースキャンプ付近の山麓で採集した植物を本に挟んで持ち帰ったそうで、実家の上目黒近くにお住まいだった原先生の奥様（道子）を通じて標本を見ていただくようお願いしたと言う。「押し花を持って諏訪山と呼ばれた小高い場所の瀟洒な洋館に伺ったのですが、原先生は品の良いソフトな話し方をする方で、素人の私の植物採集にもかかわらず快く引き受けてくださいました。そして、その採集品から数点を欲しいとの要望がありました」と梅本さんは当時を振り返って伝えてくれた。

尾瀬の燧ヶ岳・至仏山や会津駒ヶ岳などの登山から始まり、尾瀬ヶ原の植物にも興味を持つようになったころ、ようやくオゼソウの存在を知り、至仏山の木道付近で見ることができたが、思っていたより地味な草本だとの感想を抱いた覚えがある。

ところが、原寛先生のことを調べることになった最近、オゼソウを発見したのが原先生だと知り吃驚した次第で、その発見は昭和4年、学習院高等科時代に尾瀬の植物採集に出掛けての発見とのこと。のちに師事する東大教授・中井猛之進の鑑定により、新属の植物と判明している。

大場秀章・東大名誉教授編による『植物文化人名事典』から原先生の業績をたどると、その後、東京帝国大学理学部植物学科に進み、日高山系でヒダカミネヤナギを発見、数多い命名記載の第1号となった。卒業後は副手として大学に残り、講師の後、米国のハーバード大学へ留学、昭和15年帰国、助教授を経て昭和32年教授となり、46年退官。この間、35年の東京大学の第1次ヒマラヤ調査隊隊長を務め、以降2次から5次まで継続され、その成果は『東部ヒマラヤ植物誌』（全3巻）にまとめられた。

退官後は日英交換科学者第1号として渡英、大英博物館からヒマラヤ産植物の整理協力を求められ、『ネパール産種子植物集覧』（全3

寄附金および助成金などの受入報告（1月まで）

寄附者など	受入金額など（単位千円）	寄附の目的、その他
上原　充　会員	5,000	山岳会公益活動全般寄附
齋藤　惇生　会員	2,000	①本部の海外登山、ユース活動に対する寄附②京都滋賀支部の他支部との合同登山などの活動に対する寄附
森　武昭　会員	2,000	神奈川支部の活動（出版事業）に関する寄附
吉田　理一　会員	1,000	図書室の運営全般に関する寄附

巻）の主著者となった。昭和51年、日本人として昭和天皇に次いで2人目のリンネ協会外国人会員に選ばれている。優れた生物学者であった昭和天皇とは昭和25年以来、研究の相談相手を務め、『那須の植物』『伊豆須崎の植物』などの著作編纂を手伝った。また、日本植物学会会長、日本植物分類学会会長を歴任するなど植物分類学の世界的権威であった。

なお、原寛先生の父君は元枢密院議長の原嘉道であり、多磨霊園の一画に眠るが、長男・清輝が早逝したため次男の寛が男爵を襲爵していて、ともども同墓に埋葬されている。寛の戒名は、種徳院浄覺寛道居士、妻道子と眠る（多磨霊園資料による）。

（埼玉支部会員）

槇 有恒さんの愉快なお話
―大野精七先生と藤島敏男氏のこと―〈上〉

芳賀 孝郎

私は1959年から1966年まで神奈川県茅ヶ崎に住んでいた。日本山岳会の集会や年次晩餐会の折、「槇さんのお帰りにお供するように」と加藤泰安先輩に言われて、槇さんと茅ヶ崎までご一緒した。私はそのとき初めて湘南電車のグリーン車に乗った。私の気持ちは緊張していた。しかし、車中での槇さんの訥々としたお話はいつも愉快で楽しかった。

あるとき「君は札幌出身ならば北大の大野精七先生を知っているか」と聞かれた。私の父は、スキーの関係で先生にお世話になっていたので、「よく存じています」と答えた。すると槇さんがおもむろに話された。それは次のとおりである。

槇さんは1921（大正10）年、アイガー東山稜の初登攀に成功した。日本の登山家としての槇有恒がヨーロッパ登山界に初めて認められた。このころはスイス滞在中でおられた。ドイツ留学中の大野先生から手紙を受け取った。その内容はクリスマス休暇にスイスに行き、槇さんとスキーを楽しみたいとのことであった。しばらくすると、もう一人の友人、パリのソルボンヌ留学中の藤島敏男氏から大野先生と同じような内容の手紙を受け取った。槇さんは、早速二人の友人へスイスのサン・モリッツ・スキー場でお会いしましょうと連絡した。

槇さんは華やかな国際スキー場、サン・モリッツのスキーコースを滑り降りていた。ふとコースを見上げていると、さえない服装のスキーヤーが槇さんの所へやって来た。その人は大野先生であった。お互いに再会の喜びの挨拶を交わした。

大野先生は槇さんにゆっくりとした調子で話し掛けた。「先ほどゲレンデで、ベレー帽を被り格好良くマフラーを首に巻いた日本人スキーヤーに会ったので声を掛けた。すると私を見て、何か分からないフランス語でまくしたてられた。嫌な日本人がいるのですね」と言って別れた。

槇さんが別のコースを滑り降りた所で、今度はベレー帽とマフラー姿の藤島氏が突然目の前に現われた。

藤島氏も槇さんと再会の挨拶を交わした。そして、槇さんに話をした。「ゲレンデで、日本人と思われるスキーヤーに出会った。その服装たるや見られたものではなかった。煙筒掃除夫が被るような帽子に、腰には日本手ぬぐいを下げていた。国際スキー場に合わないスタイルなので、フランス語で追いやった」と言った。

槇さんは二人の話を聞いて、これは面白いことが展開すると頭に浮かんだ。ホテルに帰ると二人に電話をした。「今晩は私がご馳走するので、私のホテルに来るように」と連絡した。すると二人はホテルにやって来た。二人が向かい合わせにセットされた席に着いた。そのとたん二人はお互いに顔をそむけた。槇さんは簡単に二人の名前を知らせた。

しばらく10分以上の沈黙が続いた。

槇さんは「今日は私の招待なので、遠慮なく召し上がってください」と言った。槇さんは二人の困惑したしぐさが面白く、その様子を見ながら食事を始めた。槇さんは、二人がもう少し困っている姿を楽しみたいという気持ちがあったが、さらに5分以上の沈黙が続いたのを見て、槇さんは二人に話し掛けた。

「慶應の同窓はすぐに挨拶を交わしますが、一高・東大卒の人は、初対面の場合は顔を合わせても挨拶

をしない風習ですか」と切り出した。すると、おもむろに大野先生が「私は東大医学部を1918（大正7）年に卒業しました。現在ドイツ・フライブルク大学に留学中です。1924年に帰国予定で、その後は北大医学部に赴任する予定です」と自己紹介した。すると藤島氏も「私も一高・東大で法学部を1921（大正10）年に卒業、その後、日本銀行へ入行しました。現在パリ大学ソルボンヌに留学中です。大野さんは私の先輩です。大変失礼いたしました」と言って頭を下げた。

（以下次号に続く）

4月開催の山岳祭のお知らせ

●小島烏水祭　日本山岳会主催（四国支部主管）

4月6日㈯＝正午を挟んで讃岐うどんの接待。13～15時過ぎに碑前祭（無料）。17時30分・18時ごろ～21時に懇親会（1万円）　7日㈰＝讃岐山脈最高峰の干支の山・竜王山の登山。申込み（碑前祭、懇親会、竜王山の登山）は3月15日まで。

・問合せ＝四国支部✉　skk@jac.or.jpまで

●深田祭　韮崎市観光協会・白鳳会主催（山梨支部は実行委員）

4月21日㈰＝13時30分、山梨県韮崎市穂坂・深田記念公園にて。

・問合せ＝山梨支部　☎055－276－8004

●久弥祭　久弥祭実行委員会主催（石川支部は実行委員）

4月28日㈰＝8時より。石川県加賀市・富士写ヶ岳麓の九谷ダム広場にて。

・問合せ＝深田久弥　山の文化館　☎076－72－3313

●田部祭　山梨市観光協会三富支部主催（山梨支部は後援）

4月29日（月／昭和の日）＝8時30分、山梨県山梨市・西沢渓谷のドライブイン不動小屋駐車場にて開山式、神事。その後、西沢山荘前の田部重治文学碑前にて田部祭。開山式と田部祭は一体のものとして開催予定。

・問合せ＝山梨支部　☎055－276－8004

活動報告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

山行委員会

年次晩餐会記念山行・天覧山と多峯主山

にぎやかに美酒に酔いしれた年次晩餐会の翌日、冬晴れの下、埼玉県の名山、天覧山と多峯（とおのす）主山のハイキングに七十余名が集まってくれた。コロナ禍前は、毎年、大型バス2台を仕立てて100名を超える参加者が、富士山展望ハイキングを楽しんでいた。コロナ禍の最中はそうもいかず、小規模なイベントで我慢してきたが、久しぶりのにぎやかな山行となった。

天覧山の山頂でグループごとに記念写真に収まり、多峯主山頂では、埼玉支部差し入れのミカンをデザートに、思い思いのランチを楽しみ、のんびり歩きながらの支部情報交換と、いつもどおりの記念山行となった。

来年以降も、首都圏各支部が持ち回りで近郊の山をご案内することとなった。

（山行委員／埼玉支部・高橋　努）

天覧山山頂でのCグループ

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

信濃支部
第10回中部ブロック4支部交流会

11月18日から19日にかけ「第10回中部ブロック4支部交流会」が信濃支部の主催で安曇野市豊科南穂高の「ビレッジ安曇野」と光城山、長峰山で開催された。思い起こせば2019年の新緑の6月頭、妙高にて越後支部主催で「第9回交流会」を終え、次は信濃支部の番と思っていたが、その暮れに新型コロナウイルスが席捲しようとはだれが想像しただろうか？　それから毎年、開催・中止を繰り返し「ビレッジ安曇野」には幾度ご迷惑をかけたことか。

4年ぶりにコロナも5類になり、開催できたことに安堵。信濃支部29名、越後支部6名、静岡支部7名、山梨支部8名の合計50名の参加があり、盛会のうちに終えることができた。

18日は13時から受付け開始。名札、参加者名簿・部屋割表、ルームキー、田淵行男記念館団体入館券、明日の山行用・目印リボンを渡す。駐車場係の方は寒い中お疲れさま。15時まで講演会場の設定と、他支部の方は田淵記念館訪問へ向かう。講演会冒頭、4年ぶり

長峰山山頂での記念撮影

図書受入報告（2024年1月）

著　者	書　名	頁／サイズ	発　行　者	発行年	寄贈／購入別
小林　千穂	剱の守人：富山県警察山岳警備隊	351p／19cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
中野　純	ナイトハイクのススメ：夜山に遊び、闇を楽しむ/ヤマケイ新書	232p／18cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
荻田　泰永	北極男：冒険家はじめました/ヤマケイ文庫	336p／15cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
田中　澄江	私の好きな山の花	257p／19cm	山と溪谷社	1985	個人寄贈
角幡　唯介	そこにある山：人が一線を越える時	288p／16cm	中央公論新社	2023	出版社寄贈
若菜　晃子	途上の旅　第二集	320p／18cm	KTC中央出版	2021	出版社寄贈
若菜　晃子	旅の彼方　第三集	320p／18cm	KTC中央出版	2023	出版社寄贈
石川　美子	山と言葉のあいだ	287p／20cm	ベルリブロ	2023	出版社寄贈

に開催できてうれしく思うことを伝え、4支部交流会の歴史を少し話し、講演会に入る。信濃支部員の古幡開太郎氏の演目は「安曇野のナチュラリスト――田淵行男私が出会った偉大な博物学者」。もう一人は同支部の財津達弥氏。演目は「ナチュラリスト・田淵行男の功績」。両講演者は田淵行男氏の魅力と偉大さを十分に知る機会を得ており、田淵記念館を訪れるのが楽しくなるような講演だった。

懇親会は18時30分から、和室の大広間で行なった。席順は松本潔総務委員長の案であらかじめ支部間をばらばらにし、交流ができるように決める。冒頭、東 英樹・信濃支部長（筆者）より、自分の膝の手術の話、医者選びの大切さと転ばないように、また、この交流会で刺激し合い、活性化につながればいいと挨拶。次いで副会長の桐生恒治氏から挨拶をいただく。過去の4支部交流会の歴史から第1回の4支部交流会の話や支部の活性化の話を拝聴する。

開宴は、米倉逸生・前信濃支部支部長に乾杯の音頭をとっていただいた。各支部からはお酒の差し入れがあり、静岡支部から「臥龍梅」、山梨支部から「サドヤ白・赤のワイン」、越後支部から「朝日山」、また同支部・後藤支部長から「雪中梅」、これらもまた話の潤滑油になり、すぐに底をついてしまった。

宴もたけなわになったところで越後支部、静岡支部、山梨支部、信濃支部の順で各支部の活動紹介があった。それぞれの活動は刺激になった。工夫の凝らされた各支部内の交流（懇親会などの活動）や支部山行にもテーマを持ってやることが大事なことと話の中で感じる。

信濃支部からは古参、新参からのコメント、岳都まつもと山岳フォーラムのイベントで支部員になっての感想などなど、山の歌も歌いたかったが、あっという間の楽しい2時間が過ぎた。締めの挨拶を次回交流会開催の山梨支部長・北原氏にお願いした。その後、階下の2次会会場に場を移し、日を越えて「おらが山自慢」などで盛り上がった。皆打ち解けて大盛会であった。

翌19日は昨日と打って変わり快晴、少し肌寒いが登山日和で新雪がまぶしい。早々に朝食を済ませ、8時30分、光城山登山口に集合。軽く準備体操をして出発。信濃支部員は腕章をつけて前後、中間をサポート。長峰山では360度の展望を楽しみ、全員で記念撮影。そして、あの山は、この山は、と山座同定談義も面白かった。昨日の新雪を抱いた安曇野、大町方面の山々、田園風景、南ア、中アのスカイラインに満足して下山した。

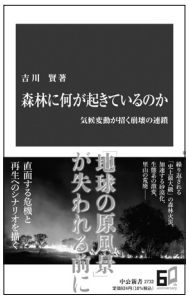
ほぼ定刻にビレッジ安曇野に戻り、カツカレーを食して次回の山梨での再会を誓い解散した。当日の会場係、また微に入り細に入り、計画・実施に携わった松本総務委員長に感謝。

（信濃支部長・東 英樹）

図書紹介

森林に何が起きているのか

吉川賢著



2022年12月
中央公論新社
新書判　231ページ
840円＋税

山を歩く者にとって森林はとても身近に親しむ存在であろう。登山口から歩めばスギやヒノキの整然とした植林、鬱蒼としたブナの原生林などが目を潤して空気も清々しい。標高が増すにつれシラビソやハイマツと植生も変化し、自然の厳しさも感じる。また、長年同じ山に行けば環境の変化により森林にかなりの影響が生じていることに気付く登山者も多いだろう。

本書は森林資源の実地調査や保護の研究に長年携わってきた著者による森林問題の解説書である。気候変動や乱開発に直面する世界の森林問題をいくつかの視点で捉えて、様々な事例や学術的な説明

もあるが全体的には啓蒙書的で登山者にとっても森林や環境問題の総合的な理解に役立つ本と言える。

直近の林野庁の森林白書によれば２０２０年の世界の森林面積は41億ha（陸地面積の31％）で、アフリカ、南米などの熱帯林を中心に依然として減少傾向にある。近年の地球温暖化にも直面して世界的に森林資源は危機的な状況だが、第１章で著者はまずシベリアのタイガの森林の危機を指摘する。カラマツなどの原生林で構成されるタイガは永久凍土と微妙なバランスで生育する関係がある。温暖化によりこれが融ける期間が長くなると夏から秋に水が不足し、ストレスを受けた樹木は枯死してしまう。その結果、森林は後退して草原化が広がる。広大なタイガの森林危機は地球的な問題である。

次の２章では著者の専門分野の砂漠化問題が論じられる。中緯度地域の砂漠化は多くの場合、人為的な伐採や農地開発が関係している。一例としてセネガルでのマンゴー植林の話がある。１９８０年代ころから日本の支援により西アフリカの砂漠化防止と農業開発を目的に大規模な灌漑によるマンゴーなどの農地開発が行なわれてきたが、一部で過剰な灌漑による地下水の枯渇を招き、水の利用を巡って現地の部族間の対立を招いてしまった。砂漠化防止と農業支援の目的が本末転倒の結果となり、ひと口に緑化対策や援助といってもなかなか難しいことが分かる。

３章は熱帯雨林の減少問題である。熱帯や亜熱帯の地域では日射量に富み高温で気温変化も小さいため植物の繁殖に有利であり、多種多様な植生があるが反面、寒帯や亜寒帯の厳しい条件で生育する植物に比してかえって環境の変化に弱い植物が多い。したがって、温暖化や乾燥化に対して熱帯雨林は最も脆弱であると著者は指摘する。

最後に日本の森林問題について著者は様々な事例を論じた上で、里山をどう持続的に管理していくかが最も重要な課題であると述べる。日本の森林面積は国土の約３分の２。このうち約４割を占める人工林は半数が50年生を超え、本格的な利用期にあるという。人材不足の昨今では土壌保全や水源涵養などを踏まえて、森林の環境保護と利用をどう両立していくのか難しい課題だろう。森林整備の財源確保を目的に２０２４年度から森林環境税の課税も始まるが、一般社会での認識はまだ低く、施策もあまり具体的でなく、安易な増税との批判も一部にある。

本書全体を通じて森林環境問題は地域の社会問題に密接に関係していることが強調されるが、我々登山者も豊かな森林を次世代に継承するために、より社会的な視点でこの問題を再認識すべきと言えるだろう。

（森田栄二）

令和５年度第11回（１月度）理事会議事録

日時　令和６年１月18日㈭　19時10分～21時10分

場所　集会室およびオンライン（Ｚｏｏｍ）

【出席者】橋本会長、永田・桐生・飯田副会長、長島・南久松・平川各常務理事、松田・池田・望月・原田・猿渡・久保田各理事、石川監事

【欠席者】佐野監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

１・高額寄附の受入れ（上原氏から）について（南久松）（賛成13、反対０）

【協議事項】

１・令和６年度の懸案事項（入会金、準会員、会報の電子配信、入会手続き）の整理について協議した（長島）

２・当会の理念「みんなの日本山岳会」構想に関連して協議した（長島）

３・入会の手続きの方法の追加（ネットからの申込み）について協議した（永田）

４・会内の情報提供に活用するための会員のメールアドレスの収集

について協議した。今後収集する方向で準備する（長島）

5・寄附募集についての案内・告知について協議した（永田）

6・事業計画のヒアリングについて協議した。支部を中心に委員会と併せて2月に実施する（長島）

7・財務改善部会からの質問事項への対応について協議した（長島）

8・マンション管理人室の借り入れおよび建替えに関する勉強会への参加について協議した。借り入れは当面見送ることにした（長島）

【報告事項】

1・入会承認報告（橋本）

2・寄附金および助成金受入報告（南久松）

3・2023後期海外登山助成の応募について（桐生）

4・山研利用料の値上げついて（平川・原田）

5・東京支部の設立に向けての進捗状況について（松田）

6・年次晩餐会収支報告について（長島）

7・海外登山報告会（ユース交流会）の開催について（永田）

8・UAAA30周年記念行事の進捗状況について（桐生）

9・支部役員のJACアカウントの設定状況について（長島）

10・信濃支部の事務局長の変更について（長島）

【その他】

1・会報「山」1月号の進行について（節田）

ルーム日誌 1月

9日　フォトクラブ　スケッチクラブ

10日　記念事業委員会（山岳古道調査）　山想倶楽部　かっぱの会

11日　常務理事会　九五会

12日　図書委員会　YOUTH CLUB委員会　山岳地理クラブ

15日　総務委員会　学生部　道のり山の会

16日　麗山会　バックカントリースキークラブ

17日　山行委員会　つくも会　三水会　平日クラブ

18日　理事会　山遊会

19日　自然保護委員会

20日　フォトクラブ　アルピニズムクラブ

22日　資料映像委員会

23日　記念事業委員会（引き継がれる山岳祭）　00会

24日　子どもと登山委員会　支部事業委員会

25日　グレートヒマラヤトラバース

26日　記念事業委員会

30日　財務委員会　記念事業委員会（山岳古道調査）

31日　資料映像委員会

1月来室者　219名

会員異動

物故

杉野目浩（4113）23・12・4

大石　惇（5834）24・1・17

太田義一（6756）24・1・5

岩田　惇（10520）24・1・20

下野武志（11166）23・12・31

斎藤トモ子（11448）24・1・9

半田由美子（13356）23・3・20

原澤　勇（14287）23・12・6

退会

木村　明（13219）福井

武蔵工業大学山岳部OB会（6109）

三浦俊宏（9638）関西

湯本一彦（9887）

太田　正（11476）宮城

山下順子（12234）埼玉

石井日出男（13609）

北原智子（15923）

野口ひかり（16688）関西

川脇大輝（16714）宮城

福田綾子（16699）

高橋武志（A0428）静岡

堀埜眞三（A0442）富山

斉藤吉江（A0529）北海道

INFORMATION インフォメーション

◆『かながわ山岳誌』出版記念講演会の開催

神奈川支部

『かながわ山岳誌』の出版を記念

して、本書の意義を広く理解していただくことを目的として、以下のような講演会を開催いたします。

日時　3月23日㈯　13～17時（12時30分から受付け）

場所　神奈川大学横浜キャンパス3号館205教室（東横線白楽駅徒歩13分）

プログラム

報告＝神奈川大学山岳部の活動

基調講演1＝ウラヤマからヒマラヤへ―本が導いてくれた山の世界―　萩原浩司氏（山と溪谷社山岳出版本部長）

基調講演2＝かながわの山岳気象　猪熊隆之氏（気象予報士）

トークショー＝かながわ山岳誌出版の意義　右記2名の講演者と執筆・編集に携わった永井泰樹、田島剛・砂田定夫、森武昭（司会）の4名に参加の皆様を交えて

参加費　無料（ただし参加には事前申込みが必要　定員150名先着順）

懇親会　講演会終了後、学内のレストランで講師を交えた立食の懇親会を開催いたします。参加希望の方は申込みの際に、その旨を記してください。会費は4000円を予定。

申込み・問合せ　氏名、緊急時連絡先、懇親会参加有無を記しkana.sec19@gmail.comへ。

＊当日の資料は、出版した『かながわ山岳誌』を使用します。同書の購入も上記のメールアドレスに郵便番号・住所・氏名を記入して申込み、代金2000円（送料込み）を指定口座（三井住友銀行喜多見支店　普通預金　0302183　106　森武昭）に送金してください。確認後、書籍を郵送します。当日の販売はありません。

「会員優待サービス」変更のお知らせ　〈会員サービスWG〉

会報1月号に同封した一覧表の中で、その後、以下のような変更点がありましたので、ご留意ください。

＊【東北北部】奥の湯・森吉山荘／削除

＊【上信越】四万ゆずりは荘／削除　赤倉ユアーズ・イン／宿泊料金の5％引き→500円引き。直接電話で申し込みの方

＊【近畿】葛城高原ロッジ／宿泊料金の10％引き適用外の期間5月1日～5月31日→4月20日～5月31日

◆原山智先生と上高地から横尾を歩いてみませんか

上高地クラブ

今年もまた5月17～19日（横尾山荘2泊）に、横尾周辺で2023年度の秩父宮記念山岳賞を受賞された原山智先生を講師に、氷河期の痕跡探訪を行なうことにいたしました。

スケジュールは5月17日の昼ごろ上高地集合、横尾山荘泊。18日に涸沢方面へ向かい、岩小屋の南岳凝灰角礫岩、さらに奥の氷河が造ったティル（氷成堆積物）のある所へ。19日は槍沢方面に少し向かい下山。上高地で解散します（希望者は20日も上高地に滞在し、昼に解散）。

主催　上高地クラブ、共催：ちきゅう研

定員　15名（先着順）

参加費　1万円（上高地までの交通費と宿泊費、昼食代）そのほかは自己負担

＊参加申し込みは　zero@qb3.so-net.ne.jp大森弘一郎へ

❖編集後記❖

●植村直己さんがマッキンリー（現・デナリ）に消えてから、今年で40年になります。2月12日が植村さんの誕生日ですので、公子夫人とともに板橋区赤塚にある乗蓮寺（東京大仏）のお墓にお参りしました。山岳部で1年後輩の私をはじめ彼と山行をともにしたり、リアルで彼を知っている人々が大分少なくなってきましたが、それでも山仲間十数人が集まってくれ、昔話に花が咲きました。

●16日には、「植村直己冒険賞」の今年度の受賞者が発表されます。過去27回続いており、様々な冒険分野で活躍された方々が受賞されています。私も推薦委員の一人として毎年、「第二の植村直己」の登場を心待ちしながら選ばせてもらっているところです。（節田重節）

日本山岳会会報　山　945号

2024年（令和6年）2月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　橋本しをり
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社